

トポスとコーラー

—アリストテレス、プラトーンにおける2つの場—

横山善裕

0. 2つの場とは、まずアリストテレスにおけるそれらであって、1つは、物(個体)の場としてのトポスであり、もう1つは、生成の場としてのコーラーです。『ピュシカ』(自然学)△1～9の場所論に対して、これまでトポス中心の研究が複数発表されてきましたが、本論はコーラーにも注目し、これら2つの場を視野に入れることによって、その結果、アリストテレスの素材(質料)論を見直すことになりました。

さらに、かれのコーラーとプラトーンのコーラーという2つの場の比較によって、結局、物の場—生成の場—映しの場、という3つの場の存在が、明らかになりました。これらは明るい場、暗部一闇としての場、遍在する陰影の場、に喩えられます。

1. アリストテレスの物の場=物を包みこんでいるものの限界(界面)

アリストテレスが場についてまず注目する例は、物の「入れ替わり」(アンティメタスタシス)である。たとえば容器の中の水がなくなると、そこに空気が入ってくる。この場合に、水が入っていたところ、今、空気が入っているところ、この空間(コーラー)が、水や空気などの物(ソーマ)とは異なる、それらにとっての場(トポス)である。⁽¹⁾

アリストテレスの場の規定は、「包みこんでいるものの、対象と直接に接している端」(プロトトーン ト エスカトン)⁽²⁾「包みこんでいるものの限界」(ペラス)⁽³⁾であるが、上の例で言うと、入れものの面、内面、つまり、水や空気を直接に包みこんでいる面(限界)が1つの場として認められる。

さらにかれは、水や空気といった自然の単純物質(4原素)には固有の場が、いわば指定席のように存在する、と言う。これは宇宙の中心からその外周へと向かって、重いものから軽いものへと、地—水—気—火を配置する、という視点にもとづくが、⁽⁴⁾このときアリストテレスは、それらの場そのものが、なんらかの力(デユナミス)をもって、⁽⁵⁾それら4原素に影響を与えている、という説明をする。しかし、これらの物の位置、上下関係は、あくまでもこれらの物体のうちの質(ポイオテース)、あるいは、ベクトルとしての力の相対的な関係によって決まるのであって、「包みこんでいるものの限界」という場の定義から考えても、場といわれるものがそれ自体で独立して存在するわけでもなく、場や位置がそれだけでも決定されてあるわけでもない。場、位置、方向などは、物と物との相対的な関係によって定まる、というのが、アリストテレス本来の観点だと考えられる。

たとえば、場のうちに磁力という力、エネルギーを見ても、場そのものにその力の根拠があるわけではなく、その実体としては別の存在、たとえば、粒子が考えられなければならない。その実体のデユナミスがエネルギーとして現れているところが「場」であり「空間」である。だから、「上とは、どこでもよいわけではなく、火や軽いものが運ばれていくところ」⁽⁶⁾と語られるように、上という相対的な場、位置関係が決まるのは、火や軽いものという実体とそれらの質が、他の存在との関係で成立している、という事実を前提としているからである。力という質の相互関係によって、場が分けられ物の位置が認められるとき、そこには質を担うものとしての実体が存在しているのである。

かれはまた数学の対象について、「場（トポス）のうちにはないが、それらにはわれわれに対する位置関係によって左右があり、それらはただ位置によってそう言われるだけで、そのそれぞれの場を自然本性上もっているわけではない」⁽⁷⁾と断っている。

たとえば、点・線・面といった限界（ペラス）そのものについて、われわれは「場」を語らない。それらについては位置関係を語るだけである。⁽⁸⁾だから、アリストテレスが、「場は、物（ソーマ）とは別のなにかであり、感覚の対象となる物はすべて、場のうちにある」⁽⁹⁾

と言うのは、物がそれら相互の力関係によって相互に移動（ポラー）を行い、相対的な作用によって場の関係、物の位置が決まる、ということを表している。物が動く空間において、物の場が存在する。アリストテレスの場とは、物の秩序が前提とされている世界を意味しており、⁽¹⁰⁾均一で静止した、スカラーとしてのひろがりのことではないのである。

2. トポスは全容の表れ

不動のものとホロン

アリストテレスの場は、あくまでも「端」（エスカトン）もしくは限界（ペラス）であるから、物そのものではないが、対象のひろがりとその場のひろがりは等しい。⁽¹⁾そして対象に内属する形（エヌユパルクーサ エイドス、モルペー）と場とは感覚によって区別できない。

「だがもし、もともとそれ自体で存在し静止しているなんらかのひろがり（ディアステーマ）があるとすれば、同じものうちに無数の場があることになる（というのは、水と空気が入れ替わるとき、水全体が容器のうちで行うのと同じことを、そのすべての部分が全体のうちで行うことになるからだ）」⁽²⁾

物相互の力関係という視点から場や位置を語るのではなく、場それ自体がたとえば真空のように存在しているとすれば、そのひろがりのうちには、水や空気の分子の動きに応じて無数の場が考えられることになり、数えられないほど多くの不統一な動、飛散がそこに想定される。が、真空の中であつてもなくても、定量の物全体の動きに注目するかぎり、無数の場という発想にはならない。ただし、真空のうちでは物相互の位置関係が定まらず、自然界における物本来の秩序が否定されるので、それは本来の場ではありえないのだ。ま

た、アリストテレスは、「動かすことができない容器」⁽³⁾としての「包みこんでいるものの、対象と直接に接している不動の限界」⁽⁴⁾を、物の場についての最終的な定義としているが、この「不動」(アキーネートン)は、物の動きを否定するという意味ではなく、包みこむものの包みこまれるものに対する不動、つまり、界面の不動を強調している。

たとえば、ある川に浮かんでいるボートにとっての場とは、不動のものとしてのその川全体である、という光景がある。川のような場合には包みこんでいるもの自体が動き、絶えずボートの周囲の水自体の入れ替わりが激しいと見えるために、川全体が場である、とアリストテレスは不動のものに注目したのだろう。もちろん、物を包みこむ不動の存在を微粒子のレベルで語ることはできない。現実にはわれわれが場を語るのは、物がその全容において同一のものであり続けていること、物がこの意味で静止しており不動のものであること、を前提として、その全体を包みこんでいるものの限界である場の持続と一性を、われわれの感覚と思考とによってとらえるからだ。

ある物がこの空気のうちにある、この空気は全体の大気のうちにある、大気全体はさらに宇宙のうちにあることによって、その物は宇宙のうちにある、と語られるように、⁽⁵⁾そのボートもこの川の中にある、と考えられる。だから、たとえばそのボートがどれほど高速で移動しているものだと仮定しても、あるいは、加速された陽子が光速に近いスピードで運動する場面を想定しても、そこに実体としてボートが認められ、10兆分の1cmという大きさの強粒子が対象としてとらえられるかぎり、それぞれの場が成立している、と肯定される。したがって、場の不動とは、すなわち、限界の不動、形の不動、つまり、その実体の全体(ホロン)としての一性を意味している。形あるところにはヒューレーが存在したのであり、数学の図形にも思惟対象としての素材(ノエーター ヒューレー)がある、⁽⁶⁾とアリストテレスは語っているから、図形はひろがりをもつ、が、場のうちにはない。場の不動とは、一定のひろがりをもつものの、自然界における他の実体との相互関係、その位置の表示なのである。

真空(ケノン)は、物とは別のひろがりとして否定され、独立に離れてあるものでも現実にあるものでもない、一種の無(メーオン)、欠如(ステレーシス)であるが、「自然本性上の移動には差異があり、したがって、自然本性には差異がある、ということになる」のに対して、「真空や無限においてはどんな差異もない」というのが、アリストテレスの指摘である。⁽⁷⁾

では、宇宙に限界があるなら、⁽⁸⁾その外には何が認められるのか?宇宙そのものは場のうちにはないから、宇宙を包んでいるものは何もない。そこにはケノンさえ存在しないだろう。それは一種の無であって、有に対する無そのものでもないからだ。

3. カオス=ヒューレー=コーラー

渾沌としてあるものの力(デュナミス)

「あらゆるものなかで最初に、無秩序なひろがり(カオス)が生まれ、その次には、胸

の大きい大地（ガイア）が」⁽¹⁾

渾沌ともよばれるカオスが、すべての物の出現以前に存在する、というこのヘーシオドスの言葉をアリストテレスは引いている。かれはこの場面を展開して、「あらゆる存在（パンタ）はどこか場のうちにある」から「存在しているもの（オンタ）にはコーラー（空間）がなければならぬ」「場の力があらゆる存在よりも先」⁽²⁾と述べ、さらに『メタピュシカ』（超自然学・形而上学）でも、このカオスをヒューレー（素材）として語っている。つまり、ヒューレーとしてのあり様であるカオスがコーラーであり、そのコーラー、すなわちヒューレーが、存在の場（トポス）の契機である。そして、カオスとしての空間は、まだ個々の物が実現していない不確定な世界であり、形が成立していない原風景である。

物の力や動きと共に指定される、秩序ある世界の物の場と、カオスとしての場との連関について、宇宙自体の生成、誕生を否定するアリストテレスは、⁽³⁾明言していない。しかし、今、明確になっている点は、形が不定の素材が充溢しているカオスという場、空間と、形をそなえた素材、つまり物、の場とに共通してある素因とは、素材（ヒューレー）にはほかならないということだ。無秩序の場と秩序の現れとしての場とを区別するのは、物のうちの力（デュナミス）、質、広い意味での形（エイダス）の有無である。秩序がないという空間には一見いろんな差異があるようでいてそうではなく、形が加わることによって確かな差異が生ずる。だから、カオスというのは、ある意味では均質なあいまいな状態である。

場は物（ソーマ）ではないが大きさ（メゲトス）をもち、また、純粋な知の対象（ノエータ）からはなにも大きさが産まれない。⁽⁴⁾

すなわち、ソーマでもノエータでもないという特異性が、場を象徴している。場は、長・広・深というひろがり（ディアステーマ）をもつが、⁽⁵⁾物のようにそれらで限定されているわけではなく、限定されている物を受容できるから、ひろがりをもつと認められる。素材そのものも限定されてはいない。素材は形によって限定されて（ホリゼタイ）物が実現する可能性（デュナミス）であり、この意味で、ひろがりをもつ。だから、場は連続量（シュネクス）である、⁽⁶⁾とも言われるのだ。物成立以前の世界では、カオスとしての素材そのものが場であり、そこには無限定（形不定）のひろがりがある。秩序の実現後には物の場が出現している。物が限定されていることによって、この場もまた限定されている。したがって、アリストテレスは、プラトンの『ティマイオス』にもふれながら「場は大きさのひろがりであると思われるかぎり、素材が場である」⁽⁷⁾と述べて、形による限定がないかぎり、素材そのものが、トポス、ディアステーマ、コーラーと同一視できることを示しているのだ。

ヘーシオドスのカオスについて、アレクサンドロスは以下のように説明する。

《「また今度は暗夜（ヌュクス）が生まれ、カオスとヌュクスによってかれ（ヘーシオドス）は素材を示している。というのは、素材は、とらえることができないものであるという点では、闇（スコトス）であり夜であり、それは形を内包し受容しうるものである（コーレーティコン カイ デクティコン）という点では、カオスである》⁽⁸⁾

4. 2つのコーラー＝イデアーを映すものとヒューレーであるもの

プラトーンは『ティマイオス』の中でこう語っている。

《まず「形」(エイダス)がある。これは恒存し不生不滅で、それ自体のうちに他のものを受け入れることもなく(ウーテ エイス ヘアウト エイスデコメノン アロ)、それ自体がどこか他のもののうちに入っていくこともない(ウーテ アウト エイス アロ ポイ イオン)。それは目にも見えず他の仕方で感覚の対象となることもなく、思惟(ノエーシス)が透察することによって、とらえられるものだ。その次に、「形」と同名でそれに似ているものがある。これは感覚の対象となり、産出され、常に移動し、ある場のなかで生成し、また反対に、そこから消滅していく。それは感覚をともなう判断(ドクサ)によって、とらえられる。3番目は、常に存在する場(コーラー)の種類で、消滅を受け入れることなく、生成するものすべてに席(ヘドラー)を提供するが、それ自体は感覚によらず、ある種の偽の推理によって把握され、ほとんど信じるにたるものではない。が、われわれはそれに目を奪われることによって、「存在するものはすべて、どこかの場においてあり、なんらかの空間を占めなければならず、地中にもなく天空のどこにもないものは、無でなければならぬ」と夢心地で主張するのである。》⁽¹⁾《それはたとえば乳母(ティテーネー)のような、あらゆる生成の母胎(ヒュポドケー)であるように思われる。》⁽²⁾

プラトーンにとっては、感覚とは無縁であくまでも思惟の対象でなければならない、と断言されるエイダスすなわちイデアーがある。たとえば「人」のイデアーがあり、これに対して、感覚によってとらえられる無数の人がいる。わたしを含めて人々は「人」というイデアーと同名でそれに似ている存在(ホモースュモン ホモイオン テ)である。イデアーは「感覚され経験される事象を根拠づける」。⁽³⁾他の受容も他への進入も他との接触もなく、イデアーはそれら無数の対象の根拠となる。では、このイデアーの世界を絶対とするプラトーンにとって、「場」とはどのように評価されたのか？それは消滅するものでもなく、感覚の対象でもない。しかし、「ほとんど信じるにたるものではない」と言われる場は、プラトーンにとって「かろうじて信じるにたるもの」であった、ということになるのだろうか。その「生成するものすべてに席を提供する」という機能が肯定されていることによって、イデアー以外で唯一、場は、消去できない契機となっている。

この内容に関連して、コーンフォードは次のように考える。

《母胎(ヒュポドケー)はそれから(エクス フー)事物が造られるものではない。それは、うつろいゆく似姿が鏡のうちに見られるように、そのうちに(エン ホー)質が現れるものである。「物質的なもの」(ソーマトエイダス)を構成するのは質であって、母胎ではない。》⁽⁴⁾

《この質はコピーであり、その原型と同じ名をもつ》⁽⁵⁾

この場に、あるイデアーの映しが現れている。だから、その映しが質であって、母胎そのものから物が構成されているわけではないとしても、その母胎、すなわち、場を否定す

ることはできない。場がなければ、われわれにとって質がなく、イデアーの映しがない。感覚の対象は、場から席を提供され、場のうちで生成しそこから消滅していく。それは純粹な理性の対象ではありえず、あいまいな判断（ドクサ）の対象でしかない。それは存在することもしないこともありうる。これに対して、イデアー（エイドス）は永遠にある。この絶対的な存在の優位が、のこる2つの種類つまり感覚の対象と場の、下位への差別によって強調されている。しかし、たとえば、「〈美〉とは何であるか」という先験的な何ものが規範・基準として働いていることによって、はじめてこの経験的事態は成立しているのだ⁽⁶⁾と述べられることによって、〈美〉のイデアーの実在が主張されているが、そこには、常に存在している「場」もまた認められなければ、感覚の対象、経験的事態は成立しない。イデアーという語によって、「場」（コーラー）という言葉もまた、逆に照射されなければならない。そうでなければイデアーしか存在しないことになる。

では、プラトーンの場合は、アリストテレースの場とどのように比較されるのか。

プラトーンの場合は感覚の対象すなわち物（ソーマ）そのものの成立の条件と考えられるから、「包みこむものの、不動で直接の限界」ではありえない。というのは、それは物の周囲の場、位置関係の場ではなく、物を映す場であるから。したがって、それはどちらかと言えば、カオス、素材としての場に近い機能を示すが、それでもなお両者の差は大きい。アリストテレースの考えでは、この意味での場がなければ、いかなる動も可能ではなく、素材のないところには、移動も生成も変質も増減もありえない。実体の生成については、「その形をほかのものの中に（エン アロ）造る」「素材はこの実体を受容するもの」、⁽⁷⁾形は「素材のうちに内在するもの（エノン）」⁽⁸⁾「この中へ（エイストディ）形を造る」⁽⁹⁾などの表現があり、素材のうちで形が実現する、という視点から物の生成が語られている。「素材は、それ自体では〈何であるか〉とも〈これだけの量〉とも、存在するもの（オン）が確定される（ホーリスタイ）条件となるその他の何とも語られないものである、と私は言う」⁽¹⁰⁾「素材はそれ自体では知りえない。が、一方に感覚の対象となる素材があり、他方に思惟の対象となるそれがあって、たとえば、青銅や材木や動く素材であるかぎりのものが感覚の対象としてあり、また、感覚の対象のうちに感覚の対象としてではなくあるもの、たとえば、数学の対象が、思惟の対象としての素材である」⁽¹¹⁾

アリストテレースは、素材自体がわれわれにとっては不可知の存在でありながら、他方でそれはまたわれわれの前に、感覚の対象としても現れ、思惟の対象としても考えられる、と述べている。動く素材としての物は、すでにそれらの形を獲得している塊もしくはひろがり（ディアステーマ）であり、実体でもある。これらに対して、形が進入してくる場所に存在する素材が、素材自体（ヒューレー カタ・ハウテン）としての不可知の存在である。この原初の素材（プローター ヒューレー）は、有を産出する無のようなものであり、「形」が普遍（カトルー）としての有の限界であって、その究極の存在としての神が永遠に現実（エネルギーア）として「ある」（オン）のに対して、この素材は可能性（デュナミス）でしかない。が、この契機がなければ、「不確定なもの」（アオリストン）⁽¹²⁾「〈ある〉ことも〈ない〉こともありうるもの」⁽¹³⁾としての個（タ カテ・ヘカスタ）、「こ

れ」(トデ ティ), つまり, 素材と形とでできているもの(シュノロン), の生成がない, 《あるものに, 場の素材(ヒューレー トビケー)があるとすると, それに, 生成消滅にかかわる素材があるとはかぎらない》⁽¹⁴⁾

生成の場としてのカオスという素材の先の極に, 不可知で全く形のない原初の素材がある. 物の場(トポス)は物のひろがりと等値であり, 感覚対象の素材はそのまま場の素材である. ところが, 数学の対象は「場のうちにはない」と断られながら, それらはひろがりという大きさをもつことによって, 自然本性上の生成の場ではなく延長の場の素材をもつと考えられる. したがって, それらにも相互の位置関係を語ることはできるのである. その延長, つまり, ひろがりは, 生成の場にも物の場にも認められたのである.

プラトーンによって, 似像というよりむしろ映像, 影像(エイコーン, パンタスマ, エイドーロン)の現出が強調されるとき, 場はイデアーを映す鏡(カトプロン)に喩えられる.⁽¹⁵⁾しかし, 映し出されてある感覚の対象がイデアーの影でしかないから, 常にあると言われながら確信の対象でもなく, その鏡面には, 明確な存在の権利が与えられていない. われわれにとっての存在, 事実とは, 知覚像であり, 現れ, 映し, 映りであり, ドクサの対象でしかなく, その認識について錯誤がありうるのは, それらがイデアーではなく像でしかないからである. 「天然自然の物」⁽¹⁶⁾と表現されるものも原範型の価値の知覚像, 映しにほかならない. だがもし, この「物」がアリストテレースの考えたように, 質を宿すヒュポケイメノン(本体)としての実体(ウーシアー)ではなく, 質(ポイオテース)そのものの現れ(ポイオン)でしかない, とすれば, プラトーンは変質あるいは動一般について, どのように説明するのか.

変容(メタモルポーシス), 変質(アロイオーシス), 変化(メタボレー)を支える個, 時の経過のなかの一性として, アリストテレースのウーシアーはある. このウーシアーそれ自体は, その形や質と素材とからできている一つの全体にほかならない.⁽¹⁷⁾だから, ここには個の場が存在する. このウーシアーは形や質そのものだけでなく, 単なる延長としての素材だけでもない. かれは, 変質や消滅などの変化を形の欠如(ステレーシス)によって説くが,⁽¹⁸⁾動において存在を貫くのが素材というひろがりであった. それは不可知の純粋な可能性としての素材まで遡れるが, 通常は質と共にある存在である. そして, 形あるものからその欠如への移行が, あるいは, 質の変化が素材のうちに見られる. 形は, 自然の摂理を通じて神という契機へとつながる必然性(アナンケー)の実現であるのに対して, 偶然性(テュケー)を可能にするのが, 素材である.

他方, プラトーンの範型(パラダイグマ)一像(エイコーン)一場(コーラー)という構図で考えると, それぞれの変化はすべて映しの転換であり, その形の変容は, 映しの姿のそれであって, 場そのものが1つの全体として限界で縁どられているわけではないから, 真実在という意味での個は, 場においてありえない. 見えているのは影であり, われわれ自身が映像に過ぎない. ある形が去った後にアリストテレースにおいては素材が残る, プラトーンにおいては場さえも残らない. 場は常に存在すると語られていても, 前者における場のように, 個の場から原初の不可知の素材としての場までの連続性が, 後者において

はないから、プラトーンの映しの場の、ある部分の影が消えれば、その影については何も残らない。個の場などというものはありえない。ただ、不可知の遍在する場の次元がいきなり現れることになる。

アリストテレスの場合は、素材と形という2つの素因によって、形質の獲得と欠如を説明するが、プラトーンの場合には映しの機能しかないから、価値（善）の衰退とか混濁とかの説明は、原範型であるイデアのほうに求められるしかない。この世界の一切の変化は範型のプログラム通りであって、この意味ですべて必然の結果であるとすれば、われわれの生自体はどのように説明されるのだろうか？⁽¹⁹⁾

われわれは「木の葉が緑から黄へと変る」⁽²⁰⁾とも言うが、アリストテレスの述語分け（カテゴリーイ）に従って正確に語ると、「この木の葉の色が、緑から黄へと変わる」という表現になる。このとき、実体としての木の葉のうちの、質の一種である色が、緑から黄へと変わるという、変色、変質がここで観察されている。このときわれわれがアリストテレスと共に見ているのは、1本の木や木々と、その単数が複数の葉であり、ある場、境界のうちにある全容としての実体であって、実体の質に注目している。「緑でも黄でもない不変の微視的要素」⁽²¹⁾を語っているわけでは決してない。

「実体は、さまざまな性質を担う何ものであるから、担い手自身はそういう色や匂いや味とは原理的に区別されるべき、別の何かである」「この点をもう一步つき詰めて考えると、それは色も匂いも味もないまったくの“純粹無垢”のものでなければならない」⁽²²⁾

ここで“純粹無垢”と形容されているものは、アリストテレスの、不可知の原初の素材に相当する。それはひろがりそのものであり、「まったくの“純粹無垢”」とさえ言い表せないものである。ところが、アリストテレスにあっては、この素材がそのまま物の素材へと変換するわけではない。それは、感覚の対象として姿を見せている素材、思惟の対象でもありえた素材の連続の極として存在する不可知のものであった。⁽²³⁾ 感覚の対象としての素材は、すでに内属する質のすべてをそなえた1つの実体の素因として機能している。わたしが1枚の葉を目にしているとき、わたしは普遍としての葉そのものを見ているわけでもなく、その葉を構成しているヒューレーそのものを透視しているわけでもない。それが、その形と素材からなる1枚の葉であり、偶有されてあるもの（シムペベーコタ）の変化、変差にかかわらず「葉」であることを見ているのである。

実体は形という限界をそなえている。それはまた、限定づけられるものとしての素材から成っている。素材つまりひろがりを前提として、その中の形質の組み合わせによって、ある実体が1つの全体として存続しているとき、われわれはこれを1つの存在（トデティ）と認める。この存在の限界が、それを包みこんでいるものとの関係で理解されるとき、アリストテレスが定義した、実体の存在の場が認識される。しかし、その場の基底（ベース）には、その個が解消する、知覚されない素材としてのひろがりがあり、もう1つの場としてあった。

これに対してプラトーンの場合とは、（写像ではなく）映像を映し出す鏡面に喩えられた。しかし、これは感覚の対象としては言うまでもなく思惟の対象であるとも明言できない、

それ自体が幻影のようなものでしかない。⁽²⁴⁾イデアーという光がなければ、その場自体が存立しないのである。

5. 形質を係留し連携する場

形質を転換し映し出す場

2つの場の差異について、さらに別の視点から考えてみよう。

プラトーンによれば、最高のイデアーであり善自体（アウト アガトン）でもある普遍知性は、限定された個々の知性という形をとって実現し、これらの知性は、感覚という方法でも普遍知性を把握するが、そのとき把握されるのは真実在（reality of existence）の表象や似姿にほかならず、これらが物体、つまり、場において生成するものであるが、これらは実在（substantial existence）ではなく、限定された個々の知性の主観的情態（subjective affections of particular intelligences）である。しかも、これらの知性にとって真であるのは、場と時における表出（representation）のほうではなく、あくまでも真実在としてのイデアーである。——と、主張される。⁽¹⁾

このアーチャ・ハインドの説明の構造を整理すると、次のようになる。

A. 普遍知性（最高のイデアー＝善）の自己表現＝個別知性

B. 普遍知性の表象・似姿（物＝場における生成物）＝個別知性の主観的情態＝個別知性の感覚の対象

場において生成する物（material objects）は、普遍知性の似姿であるが、これは、その普遍知性が形を変えた個別知性の情態と同じものであることになる。そうすると、生成が見られる場は、個々の知性において展開していることになり、その似姿が情態として現れていることになるが、それらはすべて普遍知性と表現されるものの変換にほかならないから、世界は知性の自己確認であることになり、この解釈は、同語反復（トートロジー）を主張していることになる。

プラトーン自身は、「バラを見るようにわれわれが造られていなければ、バラのイデアーはないだろう」「イデアーなしで個が存在しえないように、イデアーも個々のものなしではありえない」⁽²⁾とは決して口にしないだろう。というのは、上の説明によれば、バラもわれわれもイデアーの似姿でしかなく、われわれのうちに個別知性が見出されるとしても、それは普遍知性の現れであるから、個別であるかぎり個々の知性が機能しなくても、イデアーそのものは絶対的存在としてあるはずだからである。バラを見るようにわれわれが造られていなければ、バラの映しはわれわれには見えないが、結局、それを見るように造られているからそれが存在するわけではなく、その存在自体が個別知性の主観的情態であるから、バラの存在が即、知性活動を意味している。しかし、そのバラの表象の原型であるものは、表象よりは先にあるはずだ。

ではなぜ、真実在としてのイデアーはそれ自体で完結しないで、その映し、もしくは似姿を、物として表現する必要があるのだろうか。これはおそらく、普遍的思惟の多化

(pluralisation of universal thought) という問題に集約される。プラトーンにとって、普遍であるアイデアが絶対であるとしても、個々の知性まで否定することはできなかった。ここで、場が容認されたのである。場によって普遍が限定されることで多が実現し、多を可能にする素因として場が要請されたのだろう。

アーチャ・ハインドは、プラトーンのヒュポドケー（母胎）がアリストテレスのプロテー ヒューレー（原初の素材）に相当するが、空間（space）と同等であるのは前者だけである、と主張する。ヒュポドケーについての論旨は以下のとおりである。

《感覚の対象は進入し退行する形（エイダス）であり、これは、なにか神秘的な方法でアイデアによって放出され、母胎のうちに配置される影像である。そして、知覚のうちの属性は、唯一、ひろがり（extension）を除いて、すべてこの形（エイダス）にもとづく。換言すれば、知覚の対象である物質からすべての属性を取り除いても（abstract）、それはひろがりをもつ》⁽³⁾

プラトーンの場合、他のもののうちへと進入したそこから出て行くものはエイダスそのものではなく、影のようなもの、つまり、エイダスの映しであった。⁽⁴⁾場とは、かろうじてその映像成立のための条件として認められた。だから、その映像から属性をとってしまえば物も解消してしまうが、そこになお場といわれるものがそれ自体で存在する、とまでは、プラトーンの立場からは言えないはずだ。似姿としての映像が現れるところが場である。アイデアの映し、似姿がなければ場は存在しない。それは、アリストテレスの、素材としての場、つまり、究極には不可知の原初の素材があって、そこに形が宿っていく、という実在とは全く異なる。

アリストテレスの場には2つがあった。1つはペラスとしての物のトポス。もう1つはヒューレーとしてのディアステーマ、コーラーだった。前者は、他のもののうちの存在という包摂関係、位置関係を示す場であり、後者は、生成消滅の契機としてある、ヒュポケイメノンとしてのヒューレー、ディアステーマであり、ペラス自体を可能にする空間である。だから、質の抽象の後にのこるひろがりとは、プラトーンのヒュポドケーのほうではなく、プロテー ヒューレーとしての素材のほうである。

《青銅の球の属性はすべてヒュポドケーを満たすミメーマ（似姿）によっている。その属性をすべて抽象すると完全な真空の球空間がのこる。これは周囲の空気によって囲まれてあり、その境界で限定されている。同様に、宇宙について一切の抽象を行うと、のこるのは無限の空虚、完全な無であり、ひろがりそのものは、ひろがりのあるものがなければ無であり、これは、時を計る事象（events）がなければ時は存在しない、のと同じである。だから、コーラーというのは、そのもっとも抽象的な意味において、個々のプシューケー（精神）の感覚を可能にする永遠の法則・必然性（law or necessity）である》⁽⁵⁾

プラトーンの場合には、青銅の球がその属性の現れであり、素材と形とを区別することはできないから、抽象の後にのこるものを強いて考えてもそれが球空間であるとはとても言えない。映しが現れているところが空間、場であるから、「属性をすべて抽象する」とそこにはなにも無くなる。少なくともその空間を知ることはできない。

アリストテレスの場合には、青銅の球のうちにヒュポケイメノン（本体）というひろがり、つまり素材を認めるから、属性の抽象が可能となる。そして、球という形以外の属性を抽象してしまえば球空間がのこり、その形さえも抽象すれば、原初の素材が現れる。それはそれ自体では不可知の素材である。しかし、この素材、生成の素材は物を構成する素因であり、さまざまな形質を連携させる空間であり、プラトーンのヒュポドケーのように時を変えてイデアの映しが転換して現れるところ、ではない。そして、アリストテレスのプロテー ヒューレーは感覚では不可知でありながら、知性や思惟の対象ではありえたのだ。

6. 形を受容する場 形が決定する場

『ティマイオス』ではまた以下のようにも語られている。

《さて実際に、生成の乳母は水分を与えられたり焼かれたり、また土や空気の形(モルペー)を受け入れたりしながら、それらに付帯する様態(パトス)をも受け入れることによって、見るところあらゆる種類のものであるかのようにになりながら、相互に似てもいないし釣り合ってもいない力で満たされることによって、それ自身のどこにおいても釣り合いがとれず、あらゆる方向へでたらめにそれらの力で揺り動かされ、そしてまた揺り動かされることで逆にあの形や様態を揺り動かすのだ》⁽¹⁾

真実在の映像が現れるところ。それ本来の存在が認められていないプラトーンの場合は、ここで乳母に喩えられている。しかしここではそれが4原素の形を実際に受け入れ(デコメネー)、満たされ、揺り動かされ、揺り動かすと表現されており、カオスに相当するものであるかのように語られている。というのはこの局面での乳母は、単にイデアを映し出すものとして表されているのではなく、世界の秩序、形成にかかわるものとして語られているからだ。プラトーンは以上の言葉の直前では、「存在(オン)も場(コーラー)も生成(ゲネシス)も3者3様に宇宙が生成する以前にもある」と断言している。⁽²⁾しかし、これら3者の対比は、先のイデアー：コーラー：エイコーンとそのまま一致せず、類比による説明がこれら2組について可能であるとしても、明確な提示はない。そして、アリストテレスは、ヒューレーを母、女性、エイドスを父、男として語るが、⁽³⁾プラトーンはここで存在の父母を何と説明するのか？かれは別の場面でやはり、イデアーを父、コーラーを母、エイコーンを子として語っている。⁽⁴⁾ではなぜ母を乳母と言い換えたのか。生成してあるこの世界の存在が、影でしかなければ、それは真の意味での生成ではなく、母子関係は成立しない。だから、場は本来、乳母とさえ呼ばれないはずのものなのだ。あるいはむしろ、父母とは他人であるはずのこの名前でも場を呼び換えた、プラトーンの変化自体に注目すべきだということだろうか。

アリストテレスのプロテー ヒューレーは生成にかかわるが、世界の秩序構成の直接の要因ではない。世界を形成するのは本性につながる形質(エイドス)のほうである。

しかし、なお、場そのものもなんらかの力を有している。つまり、形の不定なヒューレーそのものとしての場の力であり、あるいは変容するものの、さまざまな形質を係留する場の力である。その力は可能性（デュナミス）にほかならない。それを現実にするのが形であり、プラトーンが上の場面で語ったようなそれ以上の能動については、アリストテレースは、場としての素材に関して語っていない。

さて、次のような批判がある。⁽⁵⁾ —アリストテレースの空間論は計量についてのもの（metrical）で、ひろがり（extension）を体積と観ていて、位置関係の総体とは考えていない。方向性（direction）がとり挙げられていない。しかし、幾何学上の立体は計量を問題にしないで構成できるし、幾何学そのものを計量という側面だけで構成することは不可能である。ユークリッド幾何は計量についてのもので、等不等に関する命題を扱うが、計量では表現できない「相似な位置にある図形」や「直線の意味の対立」などの概念を欠いている。射影幾何は、計量に関する概念や前提を必要とはしないが、計量幾何のほうは、非計量の「射影」にかかわる公準や前提がなければ完全には展開できない。したがって、論理上は、位置・方向・形の概念が計量に関する概念より先である。

アリストテレースは確かに『カテゴリーアイ』（述語系）VIで、場を連続量としても見ているが、これは、場が量をそなえている、という指摘であって、場そのものの定義やそのものの意味はそれに尽きることはなかったのである。「包みこんでいるものの、不動で直接の限界」という、空間のなかの存在相互の場、という見方を得た後に、そのカテゴリーA分類を考えると、アリストテレースの場とは、まず、包みこまれるものに対する包みこむものの限界（境界）であるから、むしろ存在関係の表示である。そこには位置も形もある。自然における物本来の位置があるという意味では方向性もある。イデアーと映しとの間の単一な上下関係や方向性とは異なる多様性がそこには含まれている。さらにまた、カオス＝ヒューレーというもう1つの場、つまり、個物の場に対する生成の場をも考慮すれば、アリストテレースの空間論はさらに大きな視野を含んでいることが明確である。

物体が連続量であるという視点についてはかれは以下のように場を説明している。⁽⁶⁾ —物体の部分については共に接触し合っている線・面を共通の境界（ホロス）として把握することができる。だから、線・面・体が連続量であるように、それらによって構成されている物も連続量である。したがって、物体を包みこむ場も連続量である。これら線・面・体、場・時はひろがりであり、数（多さ プレートス）に対する量（大きさ メゲトス）であり、数えられるものに対する測られるものである。測られるもののうち、限定されてあるもの、つまり、限界をもつものが線・面・体であり、無限のものが長さ・広さ・深さである。

アリストテレースの場とは、分割可能（ディアイレトン）であるかぎりでは量とみなされる、⁽⁷⁾ということが上で表明されているが、カオスが示す深淵は、測られるものではあっても定量としてではない。個体を包みこむ場は、形が限定されてあると感覚が伝えるかぎり、定量としてあるが、実体が未生成の、限界が不定の場においては、量のほうが形よりも先にある。というのは、分割可能な量は素材についても語られるのに対して、限定され

た量は形質をそなえた素材、つまり、物について語られるからである。だから、アリストテレスは物と場とを混同していたわけでもないし、宇宙が場のうちにはない、と言っても、それは宇宙の外の世界の否定ではあっても、宇宙自体のひろがり、その分割量の否定にはならない。(8)

テイラーはさらに次のようにプラトーンを支持している。(9)——コーラーとは、物体が占める量(体積)ではなく、さまざまな配置・構成や感覚できるさまざまな特性を、いろんな所で表す(exhibit)ものである。量が先にあるのではなく、位置関係と形(situation and figure)が先に造られる。『ティーマイオス』におけるコーラーは、形の、「計量」にかかわる特性をではなく、「射影」(projective)にかかわる特性を表現している。

ここでとり挙げられるべき点は、コーラーが、分割できるものとしての素材である、と認めるか、認めないかということにある。プラトーンのコーラーは、アイデアの影を映し出すものであり、射影の場、であるとともに、「でたらめにあらゆる方向へ揺り動かされ、逆に揺り動かす」空間でもある。したがってそれは方向性をもちひろがりをもつ。しかし、射影の場としての方向性やひろがり、揺動の場としてのそれらとでは、意味が異なる。この点についてテイラーは触れていない。揺動の場自体は分割量をそなえているはずである。また、アイデアという形の優先はプラトーンについては言うまでもない。しかし、アリストテレスは、素材は可能性(デュナミス)、力としてあり、形は現実(エネルギー)、実現であって、現実の可能性よりも先である、後者は前者から生ずる、本性上は形が素材より先、とも述べている。(10)形がなければ何の素材とも語られず、不可知な素材のままで終わってしまう。生成の方向性がある初めて素材が活かされる。したがってかれは、この意味で形質優先の立場に立つ。可能とは、何かについての可能性であり、何か、ある始原が確かに存在しなければならない。しかしなおかれは、本性上の先と、われわれにとっての先とを区別したのである。(11)つまり、生成の過程そのものに注目すれば、ある可能性が次第に実現していく。本来、目的として機能していた形質は最後に現実のものとなる。そしてなによりも2人の大きな違いは、可能性が現実のものとなっていく、ということ、現実のために可能性という段階がある、ということにある。その可能性の存在を否定するのか、肯定するのか。あるいは、アイデアとアイデアの映しとアイデアが映し出されているところ、という一元論の考え方をとるか、現実—可能、形質—素材、という対概念を認めて、形優先でありながらも、そう成ることも成らないことも可能であるという、事物の偶然性を許すか、という差である。

テイラーは結局、「形と位置」を物の特性として見るのではなく、事(events)のそれと見ている。「自然本性」(nature)についても、それを物の集合のうちに見るのではなく、生成の「発現の連続」(a presentation-continuum) そのものと考えer視点を、『ティーマイオス』から読み取ろうとしている。つまり、出来事全体が自然本性であり、相対論との関連で、空間・時間についても2つの連続量(continua)としてではなく、時空という1つの量として、生成の母胎(ヒュポドケー ゲネセオース)を解釈し、アリストテレスの「体積」(volume)は3次元の空間に過ぎず時が切り離されている、と指摘している。(12)アリスト

テレースの場の2重性を、テイラーは見落としているのである。プラトーンには、形と素材との合一による誕生という意味での、なまの生成はない。その大前提は、見えているものは映しにすぎない、ということなのである。しかし、現実には、なんらかの存在がそこに確実にある、ということ。それ自体は生成しつつある存在であっても、時を忘れて今、それが感覚の対象として現実にある、ということを肯定し、他面で、不可知の闇のひろがりやを生成する場として透視する、アリストテレースの姿を、われわれは見つめないわけにはいかないのである。

註1.

- (1) Phys. 208^b1-8, cf. 212^b28-29
- (2) 211^a32
- (3) 212^a6
- (4) cf. Cat. 6^a11-18, Phys. 216^a29-33
- (5) cf. 208^b8f. 岩田靖夫「アリストテレースの場所論」（『西洋古典学研究27』'79）p.15では「場所が（中略）物体に対して何らかの力を及ぼしている」「場所が（中略）物体に対して或る力を及ぼす實在である」と言われているが、氏自身がその脚註で記されているように「場所のδύναμις（デュナミス）とはσῶμα（ソーマ）のδύναμιςの一つの現われ方」と考えなければならない。ただし、σῶμαのうちのχώρα（コーラー）の力を私は否定しない。でない、と、動などが働かない。
- (6) 208^b19-20
- (7) 208^b23-25
- (8) cf. 209^a7-13
- (9) 208^b27-29
- (10) 世界の秩序の形成とは、相転移によって、方向性に関する対称性（symmetry, ἀντιστροφή-アンティストロペー）が破れる、ということ。cf. 佐藤文隆『量子宇宙をのぞく』（講談社、'91）p.54
 ベルクソンは、アリストテレースが運動を幾何学のやり方ではなくむしろ自然学のやり方で区別し（physico potius quam geometrico more distinxerit）、かれの場は、物体よりも先に存在するのではなく、物体から、あるいはむしろ、物体の秩序と位置から産まれる（Aristotelium locum non ante corpora exsistere, sed e corporibus, vel potius ex ordine ac dispositione corporum, nasci）と述べている。— H. Bergson, *Quid Aristoteles de Loco Senserit* (Paris, 1889), p.75. アリストテレースは「事物と同時に」（ハマ トー プラーグマ ティ）場がある、とも言う（212^a29-30）。

2.

- (1) cf. 211^a32-33
- (2) 211^b19-23
- (3) 212^a15-16
- (4) 212^a20
- (5) 211^a23-29, アリストテレースは、ある物の固有の場と、共通の場である宇宙とを区別している（209^a31f.）が、「アリストテレースは〈共通の場所（κοινὸς τόπος）こそもっとと

も優れて場所である、という言葉は何度も反復しているのである」(岩田, op. cit. p. 23) と言うことはできない。不動という意味では宇宙はすぐれて場であると言えるが、対象の物の場が「宇宙のうちに在る」で終わるわけではなく、「固有の場」(イディオス トポス) があって「共通の場」(コイノス トポス) もあり、それらは相互に関連し合っている。でなければ、なぜアリストテレスはこれほど「物の場」にこだわるのか？

(6) Met. 1036^a8-12. 1045^a33f.

(7) 215^a6-12. 現代物理学の考え方だと、ケノン、負のエネルギー粒子 (広瀬立成・細田昌孝 『真空とはなにか』講談社, '84, pp. 189ff.) やマイクロ波で満ちており、「真空といっても、われわれが知っているあれとこれがないというだけであって、われわれとなんの作用のないものがそこにあっても、それはあるともないともいうことはできない。すなわち、相互作用のないものの存在は、われわれの視界からは外れるのである」、「その意味では、真空といっても、そこにはなにもないどころではなくて、無限の未知がうまっているといつてよい」(佐藤, op. cit. p. 92). cf. 安藤孝行『科学者と哲学者の対話』(理論社, '66) p. 117

(8) cf. Cael. A5

3.

(1) 208^b30-31, cf. Met. 984^b27-29, 985^a12

(2) 208^b32-34

(3) cf. Cael. A12

(4) 209^a14-18

(5) 209^a4-6

(6) cf. Cat.6

(7) 209^b6-17

(8) *Alexandri in Metaphysica* (Berlin, 1891) p.690, 11.10-13. このような空間は、「火の玉」に続く「はるかに重い雲におおわれた暗黒の世界」(cf. 広瀬・細田, op.cit. pp.162-172), 「のっぺらぼうの、なんの構造もない、そして灼熱のガスがただ満ちている状態」(cf. 佐藤, op. cit. p.46) という、宇宙物理学の説明による、ビッグバン (big bang) 直後の相転移の状況との類比を探れる。

なお、*Simplicii in Physicorum* (Berlin, 1882) pp.527-528では以下のように述べられている。——カオスは、内包できるもの(コーレーティコン)、場でありうるもの(トピコン)を示しており、アリストテレスは、場(トポス)がヘーシオドスにとって存在し、また、かれにとって、その力はあらゆるものに優先し原理となるものであって、諸原理についての説明に特有のものでもある、ということ論じている。もし、場があっても物があるとは限らず、物があれば場がなければならず、また、あらゆるものがどこか場のうちになければならず、自然本性上、他の存亡をまきこむが他の存亡によってまきこまれないものが先であるなら、場が、最初のものであり原理となるものであるだろう、ということは明らかである。だが、カオスはコーラーではなく、オルベウスが「巨大な淵」(カスマ ペローリオン)と呼んだ、神々の、無限にかかわる増大の原因であり、オルベウスは、神々の誕生の律である時を、あらゆるものの原理とし、その後、靈氣(アイテール)と巨大な淵が現れる(前者は、神々の、限定にかかわる進行プロオドスの原因)、と述べている。

ここで、シンプリキオスは、トポスとコーラーを区別して、カオスをトポスとカスマに

よって説明している。割れ目、裂け目をも指すカスマ ($\chi\lambda\sigma\mu\alpha$) と、容器の例によってアリストテレスが説明したトポスとの、包容する力に注目したのだろう。この場合には、素材 (ヒューレー) との関連が見えてこない。

4.

- (1) Tim. 51E6ff.
- (2) *ibid.* 49A5-6
- (3) 藤沢汎夫『ギリシア哲学と現代』(岩波書店, '80) p.125
- (4) F. M. Cornford, *Plato's Cosmology* (London, '37) p.181
- (5) *ibid.* p.190
- (6) 藤沢, *op. cit.* p.149
- (7) *cf.* Met. 1015^a15ff.
- (8) *ibid.* 1037^a29
- (9) *cf.* *ibid.* Z8
- (10) *ibid.* 1029^a20-21
- (11) *ibid.* 1036^a8-12
- (12) *cf.* *ibid.* 1007^b28-29
- (13) *cf.* *ibid.* 1039^b27-31, 1060^a20-21, 1069^b14ff.
- (14) *ibid.* 1042^b5-6. これは (hapax legomenon) (用いられた例が一度だけの語句) である. *cf.* W. D. Ross, *Aristotle's Metaphysics* (Oxford, '24) II, p.227
- (15) *cf.* Tim. 46A2-C6
- (16) 藤沢, *op. cit.* p.152
- (17) *cf.* Met. Z3, 8
- (18) *cf.* Met. K12
- (19) R. D. Archer-Hind, *The Timaeus of Plato* (London, 1888) p.26では「イデアーからの離散が悪 (evil) を意味し、悪自体についてのイデアーはない」と言われる。この考えと、アリストテレスの正常一欠如 (ヘクシスーステレーシス) の考え方は近い。では、離散 (divergence) の原因は何なのか？
- (20) *cf.* 藤沢, *op. cit.* pp.87-88
- (21) *ibid.*
- (22) *ibid.* p.48
- (23) 変化を受けないもの (アパテスー $\alpha\pi\alpha\theta\epsilon\acute{\iota}\varsigma$) は、究極の素材のあり方でもなく、限りないものとしての素材も形質との関係で存在する。素材は必ず受容するものとして存在する。*cf.* Archer-Hind, *op. cit.* p.45
- (24) 写像なら素材が必要であり、映像なら光が必要。

5.

- (1) Archer-Hind, *op. cit.* pp.32, 42-43
- (2) *ibid.* p.34
- (3) *ibid.* pp.45-46
- (4) Tim. 50C9-10
- (5) Archer-Hind, *op. cit.* p.183
ibid. p.31——個々の魂の外にある唯一の存在は普遍の魂であり、物質は、その唯一の存在

が、限定された知性（個々の魂）という媒質を通過することによってできる屈折（refraction）にほかならない。物は間接的にながめられた精神であり、物がわれわれの知覚において現実性を得ているのは、知覚が、間接的な、普遍の現実性の把握にほかならないからであり、その知覚は、場（space）という制約（条件）下での普遍の知覚である。

こう考えると、プラトーンの場合とは、限定された知性、つまり、個々の魂であるということになる。ところが、魂自体はひろがりをもたない点のようなものだから、結局、アーチャ・ハインドも、プラトーンの場合は独立して客観的に存在するものではなくて、われわれの精神のうちただ主観的にある（Extension then exists only subjectively in our minds.）と言うが、それ自体は、知覚を束ねる普遍的法則という客観性を備えている、とも説明している（*ibid.* p.45）。

6.

- (1) Tim. 52D4-E5
- (2) *ibid.* 52D2-4
- (3) Met. 988^a2-7, 1044^a34-^b3
- (4) Tim. 50D2-4
- (5) A. E. Taylor, *A Commentary on Plato's Timaeus* (Oxford, '28) pp.674-675
- (6) Cat. 5^a5-6
- (7) cf. Met. Δ13, W. D. Ross, *op. cit.* I, pp.324-325
- (8) テイラーの追及（*op. cit.* pp.675-676）はアリストテレスには通じない。
- (9) *ibid.* pp.676-677
- (10) Met. 1049^b4f, 1051^a31
- (11) cf. *ibid.* Δ11
- (12) Taylor, *op. cit.* p.677

（弘前大学人文学部卒／京都大学大学院修士課程修了
日本哲学会会員／ZHTA EPG 自営）